

長岡京市史
ふるさと
ファイル

展示コーナー日より
第8号

平成14年12月
長岡京市立図書館



江戸時代の ベストセラー

所蔵資料の中から江戸時代にベストセラーとなった書物を紹介します。
当時の人々は実際にどんな本を読んでいたのでしょうか。

展示期間

平成14年12月4日～平成15年2月2日



出版の歴史

わが国の印刷技術の歴史は世界史上でもとても古く、法隆寺の「百万塔陀羅尼」(奈良時代)の経文印刷が始まりとされています。

秀吉の朝鮮出兵の結果、銅活字印刷が渡来すると、出版活動もこれまで以上に盛んなものとなりました。それまで貴族を中心としたごく狭い範囲内で書写によって伝えられていた物語文学も活字印刷され、より広い範囲で読まれるようになりました。

江戸時代に入り社会が安定するにしたがい、武士・豪商などを中心に教養、情報、そして娯楽を求めて書籍への関心が著しく高まりました。まず上方を中心に源氏物語や平家物語などの古典文学、「節用集」や「往来物」といった様々な書物が出版され、商品生産としての出版業が成立しました。



● 読書を楽しむ

嘉永7(1854)年、
『女今川状』より

江戸時代の後期には、読書は全国の町や農村にまで広がり、それにともない地方でも出版が行われるようになりました。



江戸時代のベストセラー

江戸時代、それは日本で初めてベストセラー本が出現した時代でもありました。このころの大坂では浮世草子、浄瑠璃といった新しいジャンルの大衆文学や芸能が誕生し、また、書物の需要が飛躍的に増加するのにもなって、一字ずつ活字を拾う活字印刷から大量印刷や挿絵が容易な板木彫刻による整版印刷にきりがえられていきます。

このような背景のもとベストセラー本が次々と出現し、その内容も庶民の識字率向上による読者層の広がりもあって學術書から料理本、旅案内のような実用書、娯楽に富んだ本と様々でした。

当時、1千部も売れば十分に大ベストセラーといわれ、江戸時代の初めでは井原西鶴の『好色一代男』や近松門左衛門の『曾根崎心中』などがその一例でした。

江戸時代の中・後期になると出版部数が数千部に達するものもみられ、柳亭種彦(1783~1842)の『^{にせむらさきいなかばんじ}修紫田舎源氏』にいたっては刊行された38編それぞれが一万部以上も売れたといえます。

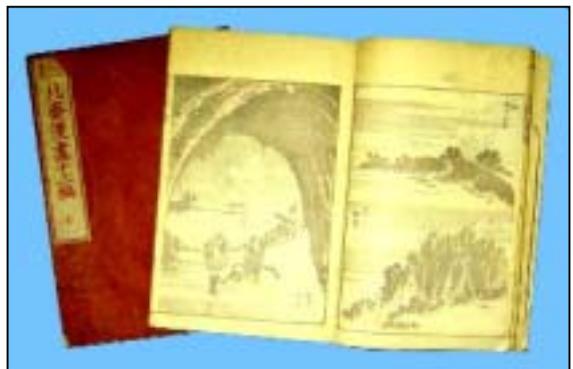


北斎漫画

(教育委員会所蔵)

江戸時代後期の画家、葛飾北斎の代表作品の一つで全15編からなり、山水から妖怪変化まで森羅万象を描いています。

文化11(1814)年の初編発行当初から広い層にもてはやされ、北斎没後も刊行され続けたというロングセラー一本です。



ここでいう「漫画」とはとりとめもなく万般を書くという意味で、今日でいう「漫画」とは少し性格が異なります。

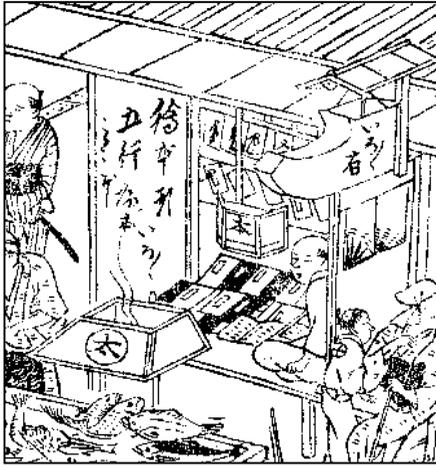


展示資料

(12月4日~1月5日)

- ・一休咄 (教育委員会所蔵)
- ・諸国物語函会拾遺 (教育委員会所蔵)
- ・源平盛衰記 (教育委員会所蔵)

江戸時代の本屋さん



- 絵本を売る本屋
(寛政 10(1798)年、
『摂津名所図会巻 4』)

『摂津名所図会』は摂津一円の名勝古跡を図入りで解説したものです。

右の絵は当時、順慶町(現在の南船場4~3丁目付近)で開かれた夜店のにぎわいぶりを描いたもので、中央部後方には「絵本類いろいろ」と書かれた本屋の出店が見えます。

江戸時代の本は、仏書・古典など内容の堅い本を「書物」、浄瑠璃本や絵を主とする通俗的な読み物を「草紙」と大きく分けられ、これらを取り扱う本屋も異なっていました。また、江戸時代の本屋は印刷、出版、販売を兼ね、さらに古書や他の版元の本の売買も営んでいました。本屋は寛永の頃から上方で急激に目立つようになり、特に大坂の心齋橋筋は江戸時代から本屋街として有名でした。

当時、本は高価で、一般庶民にはなかなか買うことのできない代物でした。そこで店舗は構えずに書物や草紙類を背負って得意先を回り、5~10日ごとに貸して見料をとる「貸本屋」が誕生しました。本を買うことのできない一般庶民は貸本屋からレンタルした本を読むというスタイルが一般的となり、19世紀の初めには江戸で600軒、大阪で300軒の貸本屋があったといわれています。

展示資料

(1月7日~2月2日)

- ・都名所図会(教育委員会所蔵)
- ・山城名勝志(教育委員会所蔵)
- ・湯島道中独案内(教育委員会所蔵)

ふるさとワーク

「ふるさとワーク」は、市内に伝わる資料をとおりして地域の歴史を学ぶ学習会です。

11月30日(土) ふるさとワークの一環として野外見学会を行いました。今回は上半期のテキストにも度々出てきた「柳谷」を目指し、1町(約110m)ごとに置かれた町石や町石地藏、弥勒谷十三仏を見学しながら、楊谷寺まで晩秋の柳谷道を歩きました。



わずかに残る旧道は、江戸時代の人々が歩いたのであろう「山道」を彷彿とさせ、古文書の世界の雰囲気を感じました。

また楊谷寺では、江戸時代に皇室から寄進された工芸品、解体修理のさい本尊十一面観音の像内から発見された鎌倉時代の文書などをみせていただきました。

途中、竹林では土入れの真っ最中。手入れされた竹林の美しさも堪能しました。



次回の展示

おふれがき
(平成 15 年 2 月 4 日 ~ 3 月 30 日)